

昭和四十七年十月五日 ご講演

「公害報道について」

東京工業大学名誉教授 京都産業大学教授 桶谷繁雄先生

お招きをいただきまして喜んで参上いたしました。その喜んでというのは、お世辞でも何でもなくて本気でございます。実は前川さんには今日初めてお目にかかったわけでございます。すけれども、私が『月曜評論』という週刊新聞をやっておりますのを応援して下さいまして、何かお礼をしたいと思っておりますところ、この和敬塾で話をしてくれといわれ、喜んで参上したというわけでございます。

私は東京工業大学の教師を三十年ばかりやって参りましたけれども、私は大学の先生になりたくてなった、なれてよかったと思っております。それは若い人が好きだからだと思いますけれども、その若い人が好きだということの現われとして、一九五七年には東京工大の学生七名を連れて、日本のスクーターでもってヨーロッパを駆け巡りました。学生には一錢も使わない、お小遣いまでこちらで出しまして、スクーターのテストとともに十分にヨーロッパの国々を見物して歩いた。この計画は大成功でござ

いました。大成功であったためにまた三年経ちまして学生五名を連れまして、ソ連の旅行をいたしております。スバル三台とプリンス・スカイウェイ一台をもちましてヨーロッパをぐるぐる回りまして、それからフィンランドからソ連にはいり、レニングラード、モスコ、ハリコフ、キエフそれからルーマニアを通過し、ハンガリーを通り、オーストリーに抜けて、あのチロルの山々の間を走り、スイスから結局またマルセイユまで戻ってくるという大旅行をいたしまして、これまた大成功でございました。ただやっている時にくたびれて、学生諸君はみな自炊で天幕生活でも何でもありませんが、私は年齢的にみまして五十近い爺さまでございましてくたびれましたけれども、然しやつてよかったですと思っております。

そういうふうなことを過去にやりましたが、終戦後大学の先生は月給が安くて困ったわけで、子供に何か買ってやりたい、わが愛妻に着物も買ってやりたいと思いましたが、お金のな

い。闇をすればいいんですが、闇をする才覚もない。そこでたまたま募集しております夏目漱石文学賞、これは賞金が大変大きくございまして、この賞金を稼いでやろうと思つて一生懸命やりました、うまく当選いたしました。選んでくれた人は、石川達三、林房雄、林芙美子、青野季吉、武者小路実篤とこの五名の錚錚たる方でございます。それ以来石川達三、林房雄氏とはずっとつき合っているというわけでございまして、とにかく自分としていろいろな可能性を試してみた。この小説の場合は別でございますが、あとは大体において若い学生諸君と行動を共にすることが非常に多かったというわけでございます。何故かという、若い人が好きだからやれたんだと思っております。

この私が、これまた先ほどご紹介にありましたように、日本の新聞がおかしいと思いましたが、それは今から十年ぐらい前でございます。それはどうしておかしいと思つたかといいますが、例えばベトナム戦争の問題につきましてUP

IとかAPというところの外電が日本の新聞に載るわけでありませぬ。その新聞を見ますと、例えば戦闘があつて、アメリカ軍の死者百十名ということが書いてありまして、見出しを見ますとアメリカが負けているような見出しでございませぬ。アメリカが勝とうが負けようが別にどういふこともございませぬが、たまたまニューヨーク・タイムズを見たのです。ニューヨーク・タイムズを見ますと同じUPIとかAPとかクレジットがついていきますから、それでもつて前の新聞の外電を思い出してみると、例えばアメリカ軍の死者が百十何名、戦場に遺棄されたベトコンの死体が二百何十名ということが書いてありまして、アメリカ軍の死者百十何名、ベトコンの遺棄死体二百何十名ということになれば、これはまあアメリカが勝つたのかなあという気もするわけでございますが、その最後の所を抜いてあるわけでございます。これはフェアではありませぬ。そこで日本のそういった外電等を見ておかしと思つた点にはマークを着けておきまして、暫くするとニューヨーク・タイムズが来ます。私はいろいろな新聞をとつていますが、ニューヨーク・タイムズが来てそこでその外電と比べて見るわけでありませぬ。そうすると、いわば一種の反米宣伝的な色彩が非常に濃く、つまり反米的宣伝になるように都合の悪い所はちよん切つてある

ということを発見いたしましたして、そういうことからこれはおかしじやないか。もちろんAPとかUPIの外電をそのまま使えといつておるのではないけれども、この切り方はおかしじやないかということ、私が新聞を責めたのがそもその始まりでございます。そういう意味からいまして、日本の大新聞というものを批判することがなければいけないと思つたのであります。

これを申しあげますと、きつと皆様も思い出す方もあると思ひますけれども、東大の宇宙航空研究所に糸川英夫という教授が居りまして、これが中心になつて日本で宇宙衛星を上げようということ、一生懸命頑張つて、ロケットの研究をしていたことを覚えていらつしやると思ひます。あの糸川がその研究費を誤魔化して妾を囲つていられるような記事が、朝日新聞に出たわけでありませぬ。そして連日のように、そういうことを書きましたので、とうとう糸川は厭になりまして大学を辞めてしまつた。それによつて日本のロケット研究は非常に遅れたという事件がございませぬ。私はその時に見ておりまして、これは明らかに名誉棄損であると思ひましていろいろ調べた結果、例えば朝日新聞では東大の方式でやつても人工衛星は上げられないということ、盛んに主張している。税金の無駄使いであるということ、盛んにい

ておるわけでありませぬけれども、私は私なりに調べまして、そうではない、東大方式で行けるということ、私は頑張りまして「朝日新聞を弾劾する」といふ物々しい記事を書いて朝日新聞をやつつけたわけでありませぬ。これで朝日新聞から訴えるといつて脅かされまして、或る日、内容証明という手紙が参りまして見たところ、これこれについてどういふ根拠があるかといふと、それをいわなければ刑法第何条によつて処置する。刑法第何条といふのを六法全書で調べてみましたら名誉棄損でございます。名誉棄損で私を訴えるといふ脅しでございます。私は臆病でございますからぶるぶる震えました。朝日新聞から訴えられて、牢屋へ入れられるとか、或は罰金とか賠償金でも取られるとかいふことになつては大変だと、私は震えました。震えましたけれども然しこれは訴えられても仕方がない。私は悪いことをした覚えがないんです。そこでその手紙に對しましては、私に証拠を出せといわれても、これは状況証拠だけでございまして、纏まつた証拠はない。しかし私は正しいと思つていられる。だからそれが悪いといふのなら訴えてもよろしいと、こういう返事を出したわけなんです。実は腹の中はヒヤヒヤしてました。しかしそれはまあ結局うやむやになつたのでございませぬ、皆さん、今日においては東大宇宙航空研の方式によりまして「たんせい」「おお

すみ一等の人工衛星がこの地球の廻りを回っていることはご存じだと思います。ということは朝日新聞が主張していたように東大方式では人工衛星は上がらないといったのに、私はいや上がるといった私のほうが正しかったということが、この事実によりお判りいただけるだろうと思います。まだ朝日新聞は私を訴える気があるのか知れませんが、それはその時のことでありまして、私は訴えられたら徹底的に戦って行く以外に男としての生きる方法はないと思っております。もともと臆病でございませぬ。臆病でございませぬけれども、ここが度胸の決め所と思ひましてやりました。大学の学園紛争の時にもひどい目に会いましたけれども、ここが度胸の決め所と思ひまして頑張り通しましたために、むしろ私は虐められないで済んだ。終わりました後で筋を通したということで、まあまあよかったです私は思っているのです。表面から見ると強そうに見えるのですけれども、ちつとも強くない。表面から見ると一升酒を呑みそうな顔ですけども全然呑めない。人は見かけによらない。

さて、そういうふうな新聞の批判を私がいたして参ったわけでございますけれども、それは日本におきましては必要であると思っております。何故かという、天皇様だつて批判される、大臣だつてさんざん悪口をいわれる。前の

佐藤栄作首相などは新聞からこてんこてんにやつつけられておりますね。ともかくどんな人だつて新聞から叩かれぬ人はない。ところが新聞にだけは誰も何にもいわれないのであります。何故か、怖いから。例えば新聞にあることないことを書かれたために、今申しあげました糸川英夫というのは東大教授を辞めざるを得なくなつた。とうとう辞めて終いました。しかし、あの人は非常に才能のある男ですから、組織工学研究所というものを作って立派にやっておりますけれども、そういう一東大教授を首にする力を新聞は持っている。然しその新聞を批判する者は誰も居ないわけでありませぬ。これはおかしい。従つて私が朝日新聞を弾劾するという文章を書きまして朝日新聞を敵として正面切つて挑戦したということは、自分でいってはおかしいのですけれども、ちよつと珍しいことではないかと思っております。

こういう非常に世の中に力を持つている新聞というものが、何らの批判に曝されることなくやつておられること自体がおかしいわけでありませぬ。その一つの例といたしましては、この前、毎日新聞でもつて西山大吉という記者が外務省から機密文書を持ち出してどうのこうのとこの事件がございました。あの時に蓮見という女子事務官が関係いたしておりました、結局情を通じていたと、色仕掛けでやつていたと

いうことはご承知のとおりだと思ひますけれども、私はそれにいたしましたも、あの事件の時に毎日新聞が「国民の知る権利」といつて大キャンペーンを展開した時に「こんなことをしたら恥の上塗りになりますよ。こんな馬鹿なことはおやめなさい」と、はつきり言つたのであります。果たして調べが進むにつれまして、あの西山大吉というのが色仕掛けで機密文書を盗み出したということが分かつて、そこでガタリと新聞のキャンペーンが止まつてしまつたということがございますけれども、ああいうものを黙つて見ていたのでは、この世に正義というものがどこにあるかということになるかと思ひます。

そしてこの新聞に書いてありますことの中で、殊にわれわれに大きく影響を持ちますものは公害問題でございます。その公害問題の新聞のキャンペーンというのは昭和四十五年から始まりまして、今日に至るまで続いております。でありますけれども、私はそのたびごとにいろいろな事実を調べた上で反論をいたしております。結局私の反論が正しかったのであります。その正しかったというところを皆さんに申しあげておきたい。これは私が正しかったというのを自慢しようと思つて話するのではありません。そんなことを自慢したところではじまらない。然し、非常に間違つたことが世の中

に流布し、人々が公害というものを非常に間違
 って見ているという事実、これは糾して行かな
 ければいけないと思うのであります。例えば日
 本の公害問題についての扱い方というのは、こ
 ういうことであります。私たちは人間でござい
 ます。物を食べてオシッコをしたり、ウンコを
 したりします。オシッコやウンコをしなければ
 死んでしまいます、そうでしょう。ところが日本
 の新聞の扱い方は、工場においていろいろな燃
 料やその他を使って煙を出しておる。その煙が
 怪しからんと、それをやめろということであり
 ます。ということはその工場を停止しろとい
 うことでもあります。操業を停止しろ、それはよ
 いでしょう。然しその中で三千とか五千とかい
 う労働者が働いている。その働いている人々のお
 給金はどうかということ、そういうことも
 考えないで、ただやめろといったのではいけ
 ないですね。例えばわれわれがオシッコをする、
 それは怪しからんから、オシッコやウンコをす
 るなどということ、われわれに死ねということ
 です。そうでしょう、われわれは生きていたい。
 オシッコやウンコをしながら生きていたい
 です。従って人間がどうしたかといえ、この東
 京都のような所では、相応な費用を使って糞尿
 の処理施設、塵埃等の処理施設を作ることによ
 ってその対策をたてている。だから工場におき
 ましても、そういう煙を出すのは怪しからん、

それじゃ煙をできるだけ出さないようにして
 くれ、そのためにはいろいろの準備があつて、
 例えば一年かかる、二年かかる、その間は我慢
 してやるから早くそれをなおせという態度な
 ら分かりますけれども、出すな、怪しからんか
 ら出すなといわれても、これは出さざるを得な
 いわけですね。公害問題というものは昭和四十
 五年から盛んになってまいりましたが、何も昭
 和四十五年から始まったわけではない。例えば
 隅田川の例をとりましても、私は東京浅草の生
 まれでございまして、少年時代は隅田川で水泳
 を習ったものでございまして。夏になりますと隅
 田川の辺に水練場というのが出来まして、丸太
 で仮小屋のようなものができまして、一夏二十
 銭か三十銭のお金を納めますと、そこへ行って
 着物を着替えたり赤禪を締めて、そこで水泳を
 習う。プールなんてしやれたもののない時代で
 すから、その頃の隅田川というものは生きてい
 たのです。ということは、引潮になつて砂が出
 た所を掘りますと、蛤だとか蜆だとか浅蜷など
 が出てきたのであります。石垣の間から赤い蟹
 が出たりは入ったりしている。潮が満ちている
 時は釣りをすることもできる。そういう状況で
 ございました。それがどんどん汚れてきた。今
 から十年以前でございましたが、あまり汚れが
 ひどくて臭くて仕様がなないということ、或る
 新聞から見に行つてくれないかということが

ございました。これは神田川の出口から柳橋の
 あたりでございまして、神田川からずうっと
 見て行つたのであります。行つてみますと本
 当に臭い。私は金属の専門家でございまして、
 あの辺の地金屋さんにまいます。どうです
 かつていうようなことを聞いたのであります
 けれども、「先生、真鍮類はピカピカ光つてい
 ないと商品価値がない。ところが真鍮は一日で
 まっ黒になつて終う。毎日真鍮の棒だとか板だ
 とかを磨いていなければならぬ。おまけに、
 臭くて困つちゃう」ということでした。私はそ
 ういった状況を見まして、当時の東(龍太郎)
 都知事に会つたのでございまして。ところが、東
 都知事は「桶谷さん、もう少し待つてくれ、そ
 の隅田川をよくするためには、あの辺の小さな
 街工場が沢山ある。都条例を作つてその排水
 を規制しようとしている。また同時に、利根川
 から水路を作つて、利根川の水を隅田川に流し
 込むことによつて、汚れたところを薄めようと
 しているのです、もう少し待つてもらいたい」と
 いうことです。それから随分経ちまして、今か
 ら三年ぐらい前でしたか、柳橋に招かれまして、
 あの辺には料理屋がございまして、夏に行つ
 たのであります。この頃はクーラーができて
 おりますから、夏でもガラス戸は締めてありま
 したが、女中さんに「この頃の川の状況はどう
 ですか」と聞いたら、「先生、もうそんなに臭

くないんです。開けてもいいんですけど、まあクーラーがあるから締めてあるんです」ということで、私は下駄を履いて庭に出まして、川の状況を見ましたら、前の状況に比べて、非常に改善されておりまして。そこでまた、東京都の河川局長に会しまして「隅田川は今より綺麗になるかどうか」ということを聞いたのであります。ところが「先生それは不可能です」「何故か」「それはいろいろな都条例によって、工場の排水を規制するといっても、これ以上規制したら、工場は潰れて終う。また利根川の水も、水利権その他の問題があつて、これ以上隅田川をよくするためには、東京都一千万の台所の流し水を気をつけてもらわないといけないんだ。各家庭で、このくらいは、よいだろうということで、洗濯や何かの水を流す。それが隅田川の水を汚している。都民の皆さん方は、何にもご存じないけれども、一人一人がみんな加害者になつていて、それをよくするためには、東京都に下水道を十分に作つて、浄化装置を通したものを隅田川に流せば非常によくなくなるけれども、そのためには五兆円から六兆円の金がかかる」ということをいわれたわけです。つまり、隅田川を汚しているという意識は、東京都民には誰もないと思ひます。しかしそういう人たちが、毎日少しずつ流した水が隅田川を汚している。或いは東京湾を汚しているということを考えなければなら

ない。あなた方が隅田川を汚しているという意識は全くないでしょう。ないけれども汚しているのです。私もそうです。そういうものを考へて公害というものの広さというものをまず知つていただきたいと思つております。

ところが、そういう隅田川の汚染問題等は、古いことで、その頃はあまり誰も気にしておりませんでした。どういうわけか知らないけれども、昭和四十五年になりまして急にいろいろな公害問題というものが新聞紙上で大きく取り扱われるようになってきたのであります。これは関係があるのか、またないのか、何ともいえませんが、昭和四十五年には日本共産党大会におきまして、公害問題は日米安保条約の結果こういう公害問題が生じているのである、従つて日米安保条約破棄のために公害問題を梃子にして強力な闘争を展開しなければならぬ、ということをも日本共産党が決議しております。これとの関係は何とも言へませんが、けれども、どうもこれは偶然の一致ではなさそうでございます。

さてその実例を申しあげてみたいと思ひます。皆さんご承知のチクロという人口甘味料がございます。チクロというのはサイクラミン酸ナトリウムという人口甘味料でございます。コココーラ、ペプシコーラ、サイダー、ラムネ、果物の缶詰類その他たくさんのもので使われ

ておりました。ところが昭和四十四年頃でございましたけれども、アメリカにおきまして、このチクロに発癌性があるということを、或る学者が発表したのであります。学会で発表したものでありますけれども、学会の発表の性質というものをも日本の新聞記者は知らないものであります。私は学者でございますから、学会の発表というものはどういふものであるか分かります。例えば或る実験をいたします、そしてその実験結果で非常に有益であると思われるものを学会で発表します。ところがそこには専門家がみな集まつてますけれども、専門家からいろいろ質問が出ます。その質問に対して答へる。分からないところは分からないということでありますが、もしその質問した人たちで、どうしても気になる点がありましたら、それぞれの研究室に戻つて自分たちでもう一度その実験をくりかえしてみます。そうした上で、その結果が発表した人の結果と一致するならば、ほぼ学会でもつてそれは本当だということが認められるわけでございますが、やつてみて駄目だ、あれは嘘だということとは、これは一年ぐら以後になつて分かります。ですから学会で発表したことがすべて本当だということではないのでありますけれども、日本の新聞記者はそういったことを知りませんので、学会で発表された、これには発癌性があるんだ、ということを連日書

き立てたことを覚えていらつしやると思いますが。厚生省もあんまり新聞が騒ぐものですから、チクロの使用禁止、それから使われているいろいろな缶詰類も或る猶予期間をおいてその間に全部処理してしまえという通達を出したことがあります。私はあのチクロに発癌性があるということを知り、新聞が騒ぎ立てている時に、或る癌研究の権威者に会って「先生、チクロの問題は、どうお考えですか」と聞いたら「桶谷さん、あれをうちの研究所で今追試をしておるけれども、その結果が出るまでは解らないけれども、私の感じからいうと、今までの使われ方をしてる限りチクロは害がないと思う」。これは癌の専門家の話です。私はお茶の水の東京医科歯科大学で戦前に講師をしておりまして、いろいろ教えておりましたが、その当時の生徒が今日では教授になってみな偉くなっております。その一人で生理学の教授に電話を掛けて「あれはどう思う」と言いますと、「先生、あれはね、あんなに騒いでいるけれども、私は害がないと思うんですよ」というわけで、専門家が二人とも害がないというんですね。ですから私も自信を得て、或る日日本青年会館で開催されました婦人研修会といつて五六百人集まりましたが、そこでこんな話をしたんであります。「チクロは、今ちょうどスーパー・マーケットへ行くと缶詰が山のように積まれている。一個

百五十円とか二百円とかいうのが三十円とか五十円とか嘘みたいな値段で売られている。見るとサイクラミン酸含有と小さなラベルが貼つてある。これはチクロ入りです。しかしチクロは新聞でいうようなものではなくて、害がないと思えます。従つて私は沢山の缶詰を買つてまいりまして、毎日食後に桃の缶詰や蜜柑の缶詰とか食べております。害はありません。どうか皆さん今がチャンスですから召し上がって下さい」というようなことを言ったのです。これが速記になりました。パンフレットができました。ここにそのパンフレットを持って来ましたが、そのことが書いてあるのであります。これが読売新聞の目にふれまして、読売新聞に読売寸評という欄が下の方にありまして、これは私の名前は出しませんが、「さる科学者がチクロは害がないからせいぜい皆さん食べなさいといつて奨めておる。当人が食べて癌になるのは自業自得でよいけれども、その言葉を信用して食べた人が癌になったら可哀そうじゃないか、無責任なことをいう」と悪口が書いてございました。だから私はすぐ手紙を出しました。筆者がどんな人だか知らないんですけども、「あなたは何故私があのような発言をしたかということをおもひ考へて下さい。チクロが毒だといふ俗説をあなたは信じているだけで、しかし新聞記者である以上、相当の権威者

に本当かどうか聞いてみるチャンスはいくらでもある筈だ。私は相当の権威者にちゃんと聞いて毒でないという確信を持ったから書いたのだ。そういう点を調べもしないで無責任も甚だしい等というのは、あなたの方こそ無責任も甚だしいではないか。もう少し勉強をしても「書きなさい」と言つてやったのであります。さて、このチクロがどうなったか、こういう騒ぎで小さな製薬会社が一軒倒産しました。これは名前も解つておりますが可哀そうですね。このチクロが一体どうなったかということですが、これは昨年の春、スイス連邦政府がテストをいたしました。今までのような使われ方をしてる限りにおいてはチクロは無害であるという発表をしたのであります。なぜ日本の新聞がそれを知らせないんですか？ 皆さんご承知と云つて騒いだ新聞が、無害だといふスイス連邦政府の発表はもう頬被りで書かないわけですか。これは無責任じゃないですか？ 「知る権利」をいう新聞ならそういうスイス連邦政府の発表があつたといふことをみんなに知らせた方がいいやないですか。それを知らせないんです。そこで面白いことは、日本ではまだチクロは使つておりませんが、日本の製薬会社はほとんどチクロを製造しております。それはなぜかといひますと、日本のチクロは値段が安く非常に性

質がよいのであります。だから世界中から注文が殺到しておるのであります。あのチクロ騒ぎの時に倉庫に溜っておりましたチクロは、スイス連邦政府の発表がありました直後にあつという間に世界中に売れて終わったわけです。製薬会社はホクホクしておりました。「先生、お蔭様で儲けさせてもらいました。一年間の倉敷料の何倍も儲けさせていただきました」とニコニコしておりました。然し日本ではチクロの赤字も新聞に出ませんでしたから、今日依然としてチクロは害があると思っております。あなた方も害があると思つてゐるに相違ない。ただこれは昨年の『週刊現代』という週刊誌の二月二十五日号に、医事評論家の石垣純二という人がこういうことを書いております。「チクロは極めて無害で厚生省当局を禁止に踏み切らせた膀胱癌の発癌性もどうやら怪しい。何故なら鼠の発癌性はプラスであつたが、同じげっ歯類の兎や二十日鼠には発癌性はマイナスで、あの程度の薄弱な根拠で禁止とは、行政の行き過ぎである」とこう書いてあります。こんなものは皆さんご存じないですね。たかだかこの週刊現代という週刊誌のほんの小さな所でございますから、私は何故チクロが無害であるというスイス連邦政府の発表を日本の新聞が報道しないか。これは知る権利という立場からいって非常におかしいといえるわけでありませぬ。従つ

てあのチクロ騒ぎは幻であつたと今日はつきりいえるわけでございます。第二の例といたしまして、ここからそう遠くございませぬ牛込柳町の自動車排気ガスの鉛の問題であります。鉛害問題、このそもそもの発端は新聞にはさういつたことは書いてございませぬが、共産党関係の病院がございまして、これは民医連といつております。その民医連の共産党のお医者さんたちが柳町交差点近傍の八百屋さんだとか魚屋さんだとかいう人から、血液と尿を採りまして、それをテストした結果環境基準職業病と認定される量の三倍もその血液の中に鉛が含まれてゐるという非常にシヨッキングな発表をしたわけでありませぬ。これは最初に『赤旗』に出ました。ところがそれにいろいろな新聞がワアーツと飛びついて、連日のように牛込柳町の鉛問題ということで書き立てた。これも皆さん覚えてゐるだらうと思つてます。私はこの報道を見て直ぐにこれは嘘だと思つてました。間違いだと思つてました。何故かといふと、これまた私はお医者さんにちゃんと電話を掛けて聞いたんです。この三倍もの鉛が尿や血液の中に含まれてゐるといわれる人たちは当日までピンシヤン働いていたのです。私はこのことを弟子のお医者さんの医科大学の教授に聞いてみましたところ「先生、三倍も含んでいたらとつづくに死んでいませぬ。死んでいなけ

れば重病で寝込んでいませぬ。当日までピンシヤン働いていたということは、その測定値が誤りであると私は思ひます」といふことでは、それからもう一つ、私は化学分析はよく知つてゐるので解るんですが、分析が難しいのであります。ppmこれは百万分の一でございます。普通われわれが分析に使いますパーセントは、百分の一ですね。百万分の一の分析というのは難しいのです。もちろん最近のようにいろいろな測定機械が発達しておりますと、百万分の一程度の分析も正確にできます。正確にできますけれども、これは難しい。どう難しいかといひますとここに水差しがあります。これは、鉛ガラスでございます。鉛ガラスに非常に綺麗な水を入れまして一時間、二時間、五時間、十時間といふふう

に時間が経つことに水を取り出して、その分析の機械にかけますと、鉛の量が段々多くなりまして飽和するといふところが出てまいります。といふことは、このガラスから鉛が解け出して、水の中にはいつて行くといふことでもあります。

この机の上にある水差しの中の水は水道の水だと思ひますが、水道の水は鉛管を使つております。鉛管を使つておりますから、われわれが呑む水道の水には相当の鉛が常に含まれております。相当の鉛といつても大したことはございませぬ、私は東京の水を六十二歳の今日

まで呑んでおりますけれども、鉛の害があったとは思えない。従ってこのくらいの水は何でもなく呑めますね。共産党のお医者さんは、そういう尿を採り血液を採る。尿はピーカーにオシッコをさせたんでしょう。血液は試験管に入れたでしょう。そして何十人と採りますと、一度に分析できませんから、それに防腐剤のようなものを入れて冷蔵庫に蔵っておいて、それを処理が済んだ順に出してやったでしょう。恐らく一カ月かかったでしょう。一番最後のやつは一カ月間冷蔵庫の中にはいつていますから、その試験管なりピーカーなりガラスの中に含まれている鉛をたつぷり吸い込んでおります。それを分析すると鉛が沢山出てくるのは当たり前であります。そういう場合にどうするかといいますと、ピーカーにしても試験管にしても、或は注射器にしても、ガラスを沢山使っていますけれども、そういったガラスから鉛が出てこないということを十分確認しないと、ppmの分析はできないわけでありまして。どうも共産党のお医者さんはこれをやった形跡がない。従ってこれは分析の誤りであろうといえるわけですね。従いまして私は、その立場でからかってやったのです。若い新聞記者が居りましたから、「君は鉛の害が大変だ大変だといっても、取材は社の自動車で行くではないか。本当に自動車の排気ガスのことが心配なら、草鞋を履いて、歩い

て行け」と言ったんです。「先生、ひどいことをいうなあ」とか何とか言っておりましてけれども、結局私の言ったとおり間違いだっただんです。これは、東京都の衛生局がこれが大変だということでも分析しました。東京都の衛生局には専門家が居ります。どんな人が居るかこちららはよく知っております。それが今いったように、そういうガラスの中に含まれている鉛がみんないかなような状況にしてテストして、結局これは昭和四十五年六月二十七日に「鉛の影響はないとはいえない、しかし、三倍なんていうのは間違いである」ということで、このこともちゃんと幕が閉じてしまったのであります。つまり、鉛の害の問題というものもこれまた、幻であったということでもあります。ただおかしなのは、この東京都の衛生局の発表というのは、今まで連日のように鉛の害が大きく何段抜きか出てきましたが、この東京都の衛生局の発表は探さないと解らないくらいいかに小さく出たわけです。しかもおかしなのはわれわれ常識的にいって牛込柳町附近に知り合いがあつたら「大したことがなくて本当によかつたですね」と言つて喜びの言葉を述べるでしょう。ところがその当日の新聞を保存してありますけれども、地団駄踏んで悔しがっているんです。「東京都衛生局では健康な人の小便を混ぜて測定したんだらう」とか、何だらうとか言つてその結果に

悪態を吐いているんです。これはおかしいですね。ということは新聞が牛込柳町の鉛の害の問題をいろいろやつたけれども、それはヒューマニズムの立場からやつたのではなくて、センセイショナリズムからやつたのである。従つて牛込柳町で五、六人の人が死んでくれたらよいと思つているとしか考えられないと私は思います。本当にヒューマニズムの立場でやつたのならば、「牛込柳町の住民の方々よ、この東京都衛生局の発表で安心なされたでしょう。われわれも騒ぎ立てましたけれども、どうかこれから安心して下さい」というのが、これが普通じゃないですか。ところが悔しがつて地団駄踏んでいる様子がその記事から見えるということ、私が今申しあげたことは万更嘘ではないだろうというわけがあります。つまり、チクロが幻であり、牛込柳町が幻であつたということでもあります。

第三の実例は光化学スモッグであります。これもまた有名な話であります。つい最近石神井南中学校におきまして、光化学スモッグが連日のように新聞を賑わしたことはご承知のことと思ひます。そもそのはじまりは、これまた昭和四十五年七月十八日でございます。東京都杉並区にあります立正学園高校の運動場で遊んでいた女の生徒が四十数人が、バタバタと倒れたということと、周囲に植えてあつた榉の葉

がパーツと散ったという表面に現われた現象は、この二つだけであります。そして調べてみますと、バタバタと倒れたというのは嘘で、誰も倒れてはおりません。ただ目がチカチカすると何かとかいうことはあったようでありますけれども、バタバタと倒れてはおりません。この日の事実を報道する新聞、私の言葉に疑いを挟む方は朝日新聞の縮刷版昭和四十五年七月十八日の所をあげてご覧いただきたいと思えます。その見出しは「光化学スモッグか？」そしてこういうのは光化学スモッグではなからうか？ というふうにいっておるのであります。厚生省公害課長の談話が載っております。人が倒れるほどの被害は光化学スモッグだけの原因によるものとは考えられない、〇・三七ppm のオキシダントが測定されたというけれども、ロスアンゼルスでは〇・五ppm という濃度が記録されているのに、人が倒れたということはない。またこれが本当の光化学スモッグであるならば、もっと広い範囲に亘る筈である。立正学園の運動場のみに限定されるのは光化学スモッグとは考えられない」と、こう言っておるのであります。私はたまたまアメリカに行きました時に、ロスアンゼルスで光化学スモッグに出会っております。サンフランシスコから飛行機に乗りましてロスアンゼルスに行くと、

着陸の前に上空を旋回いたしておりますと、向こうの方に茶色の雲がずうつとありました。茶色の雲というのはおかしいですね。妙な雲があるなあーと思ったんですけれども、降りまして日本の方々に出会ったんですが、たまたま或る日のこと、「今日は光化学スモッグが相当強い」というんです。外を歩いていると目がチカチカするという感じでございました。光化学スモッグがどうかということがロスアンゼルスで盛んに話題に出たのでありまして、光化学スモッグが東京都の杉並区の立正学園高校の運動場だけに起こるなどということは絶対にあり得ないのであります。光化学というのは光の化学であります。光というのは太陽の光であります。光化学スモッグが起こるとすれば、例えば杉並区全域、杉並区と世田谷区と大田区を合わせた全域、或は東京都全域という所になら起こりません。けれども、その中の極く一部の地図で見ても分かりますが、ピンの頭のような立正学園高校の校庭だけで起こるなんてことはあり得ない。石神井南中学校の校庭だけで起こるなんてこともあり得ない。従って厚生省の公害課も否定的でございます。ところが新聞記事の縮刷版を順にあげて行きますと、光化学スモッグか？ という『？』がなくなりまして、光化学スモッグとなり、断定しているのですが、その間に何ら科学的検証というものが、新聞記事を見る限

りにおいては出ていない。だから「光化学スモッグではないだろうか？」というのが、「光化学スモッグ」になってしまったというのでありまして、これまた幻であり、幻想であるということがはつきりいえるのであります。それから十日経ちました七月二十八日頃、東京の広報車が、何かいって走っております。ちょうどたまたま私は有楽町駅を出たところでありましたが、東京都の広報車はこういっております。「皆様ただ今光化学スモッグ警報発令中です。どうか家の中に入ってじっとして居て下さい」。そんなことをいわれたって、こっちは駅を降りて用足しに行くところで、家の中へ入れといわれたって、まあデパートでも入ればよいのかも知れませんが、入ってじっとしておれといわれたって無理な話ですね。その光化学スモッグ警報が出されるまでの十日間に、立正学園高校の事件が光化学スモッグであるという確証が一つも科学的になされていないのであります。これは東京都公害局を調べましたら間違いない。しかし、まあ一応アメリカからいろいろな機械を買って来て、そのオキシダントのメーターを見て、その針が動くから一応安全のために光化学スモッグ警報を発令しておこうやということでもあります。それはとうとう光化学スモッグを實在させることになってしまったということでもあります。私は東京において光化学スモッグ

というものが無いということを知っておるのではございません。恐らくあるかも知れませんが、その主な原因は自動車の排気ガスであるということもまず間違いないと思う。然しながら東京都がやっておりますことは、ロスアンゼルスの研究をそのまま引き写し、ロスアンゼルスで使っている計器類をそのまま買って来て光化学スモッグだ、光化学スモッグだといっておる。それがいけないといっておるのです。ロスアンゼルスはご承知のとおり、年間降雨量は二百何十ミリです。東京都の年間降雨量はそれの十倍以上です。ということは東京は空気が湿っぽいんです。それから東京都の近傍には京浜工業地帯という工業地帯がある。ロスアンゼルスにはありません。東京はロスアンゼルスに比べて風がよく吹く。気象条件や何かが違っているのです。そういうのを無視してロスアンゼルスの光化学スモッグのパターンをそのまま東京でも起こるといふことを考えてやっていると、いけないといっておるのです。果たしてこれも新聞で覚えていらつしやると思いますが、夜中に光化学スモッグ警報が発令されたことが三回あったんです。太陽の光のエネルギーによって、普通起こり難い化学変化というものが生ずる。それを光化学反応といっておるのです。それが夜中にどうして起こるのですか。夜起こるといふのはメーターが間違つてると

いうことであります。

そういう状況でございまして、この前の石神井南中学校で光化学スモッグ騒ぎがございまして、連日新聞が書き立てたことは皆さんご承知のとおり。ところが東京都公害局の係官が行きまして、運動場でいろんな装置を着けて大人が走ったり何かしている時に、何にもない時に教室の中ではバタバタ生徒さんが倒れているという事実があるわけでありまして。これは精神病の大家の斎藤茂太さんが言っておりますけれども、集団ヒステリーだと言っております。集団ヒステリーというのは、例えば明日試験がある。勉強をちつともしていかない。何としても試験を受けたくないんだと思っております。自然に気分がすぐれなくなつて、朝飯でも食べてないと、フワーツとなるということは皆さん方も経験なさつておられると思います。そういう時は心因性のもので、私も思い出しますが、もうじき試験が始まるという時に何かお腹が痛くなる、或いはオシッコが出たくなるということがあります。急いで便所へ行きますと、別に悪い物を食べたんでもないのに下痢をしたりなんかする。これは心因性の下痢でございませぬ。精神病の専門家に聞いたんだから間違いない。「そういうことがありますよ、桶谷さん」と言っていましたから、そこで結局、東京都の衛生局で調べまして、あれは心因性の要素が濃

いという結果を発表しましたね。心因性の要素が濃いということは、ざつとばらんに申し上げますと、斎藤茂太先生の集団ヒステリーだということでもあります。まさか、集団ヒステリーとはいえないものですから、心因性の要素が濃いなんて、もつたい振つた言い方をしたのであるうと思ひます。そのことを証明するのが朝日新聞の投書欄に石神井南中学校の生徒の投書が載っております。私は面白いから切り抜いて取つてある。「私の学校では光化学スモッグ騒ぎが大変ですけれども、みんな嘘です。気を失つて倒れると大人たちが騒ぎ立てるのが面白くてたまらないので、みんな競争してやっています」。本当ですよ。そういう投書が載つていたんですよ。この事実からお解りのとおり、この石神井南中学校における光化学スモッグ問題というものは、明らかに幻であつたのではないだらうかと思ひます。そもそも立正学園が幻であつた、今度の石神井南中学校も幻であつた。だとすると光化学スモッグ問題として新聞に現われたものは総て幻であるといえると思ひます。ところがこれがそのままでは済まない。あの進歩的である美濃部都知事がテレビでも言いましたけれども、あの石神井南中学校の問題の時に「このままでは子供たちの生命が危ない。何としてでも東京都内の自動車の交通規制をしなければいけない。警視総監とよく話し合

「つて自動車の規制をしなくてはいけない」ということをテレビで言うておりました。私はこれは大変だと思った。いいですか、東京都知事が、そういうことを言い、警視庁がそれをやったとすると、これは根拠が極めて薄弱ですね。だのにそういう取り締りをするというのは、取り締りはお巡りさんがやる。お巡りさんが袋叩きになります。これは大変なことです。つまり、幻が、実際の自動車の規制という大事件にまで行く可能性はあるんです。従いましてこれは非常に気をつけなければいけないと思います。

それでは、お前、そんなに自動車の排気ガスを沢山出して、人々の健康によくはないことは明らかではないか。それでも、お前よいかといわれそうですが、私はよいとは思っておりません。自動車は私も運転しておりますけれども、無公害であってほしいと思っております。ところがこの無公害ということで、アメリカでマスキング法という法律ができて、一九七五年までに一酸化炭素はこれこれ、酸化窒素はこれこれ、ハイドロカーボンはいくらまで少なくしろ、という七五年の基準というのがございまして、アメリカのフォードにしましてもGM（ゼネラル・モーターズ）にしてもドイツのフォルクスワーゲンにしても、一生懸命にやりました、七五年までにはできそうもないということを書いておきます。ところが皆さんよく知って

ただきたい。日本では東洋工業と本田技研がつい最近できました。他の国々ができないといっていた無公害エンジンの七五年の基準に合致するエンジンを拵えたのであります。ついこの前テストをいたしました。大成功でありました。そして本田技研のやり方は、総て公開されますから、日本の自動車は全部その本田技研のやり方に従った無公害エンジンのやり方に近くなります。そういう意味からいまして、私は日本の自動車工業というものは、非常にバイタリティがあり、非常によくやっていると、ゼネラル・モーターズとかフォードができないことをやり遂げたということ、私は大いに自慢できるのではないかと思います。この本田技研のやり方は、実はつい先日新幹線で、本田宗一郎さんと一緒にしまして、朝早い時間で汽車が空いておりましたので、京都まで三時間、私はいろいろと聞きました。安心したわけでありませぬ。もちろん内容の細かい処は秘密でございますから申しあげられませぬ。

それにこの研究には、ソニーが一枚噛んでいられるんですね。これも面白かったです。あの本田宗一郎さんがソニーの井深さんの所へ頼みに行つて、「エレクトロニクスで何とかやれないものか、調べられないものだろうか」というて頼んで、井深さんも「それは面白い、やってみましょう」ということで、成功したんです。

細かいことは申しあげられませんが、その程度のことは申しあげられます。ともかく、無公害エンジンが、近くできます。七五年までには間に合います。そういうふうなことを考えますと、結局、この光化学スモッグという幻は、幻のまま消えて行くのではないかと、思っております。

それまでの間、無公害エンジンができませんで、の間、いろんな排気ガスがありますけれども、この排気ガスでわれわれの生命が縮まってくるのかと思つて心配しておつたら、そうではございませぬ。昭和四十七年七月二十一日、つい三カ月ほど前に厚生省から昭和四十六年簡易生命表というのを発表されたわけでありませぬ。四十六年ですから、四十五年のデータを元にやつた。それによりますと、女は七十五歳、男も七十歳台に寿命が延びた。平均寿命が十カ月延びたということでありませぬ。私は厚生省に電話を掛けて「いったい都会と田舎ではどう違ふか」と、聞いたわけでありませぬ。ということは、大都会の人は、自動車公害等で痛めつけられて寿命が短いだろうと、田園部ですとよい空気を吸っているから寿命が長いだろうと思つて聞いたわけでありませぬ。そうしたら、「大都会と田園部という調べはないけれども、例えば東京都と岩手県という調べならある」ということで、面白いことには東京都のほうが長生きです。つまりいろいろな公害問題で痛めつ

けられてる筈のわれわれのほうが、岩手県で綺麗な空気を吸っている人より長生きしている。これは、公害問題というのは、まだ間に合うということの意味している。今から手を打てば間に合うということでありませぬ。ところが、幸いに日本では、今申しあげたような無公害エンジンの開発が成功しておりますから、私は大丈夫だとそういう意味から申しあげて、大丈夫だと思っております。

このようなジャーナリズムを批判する立場ということをやっておりますと、いろいろと風当たりは強い。例えば朝日新聞から訴えられるとか何とか脅かされる。日本のジャーナリズムからは村八分を喰う。テレビとかラジオなんかはこちらから断わっておりますけれども、しかし、「徳は孤ならず、必ず隣あり（徳不孤 必有鄰）※論語里仁」という言葉があります。私のやっていることが徳であるかどうかは別問題といたしましても、段々と仲間が増えて来たということはいえます。なぜかという、私が申しておりますことはいよいよ加減なことではない。新聞が悪いということ、何が悪い、何が悪い、はつきり具体的に指摘している。従って新聞としては、具体的に反論できない。特に今申しましたチクロにしても、柳町の問題にしても、光化学スモッグの問題にしても、新聞は反論できないわけです。そういうのを考え

ておりますと、桶谷はよくやっていると、孤軍奮闘しておるではないかといって、一人二人と仲間が増えてくる必要があります。どうせ片方は、大新聞を併せて、二千万以上の読者を持つています。私のやっておりますこの『月曜評論』というのは、全部まけても一万以下です。

これは螻蛄の斧ですね。けれどもこれは分かつて頂きたい。万里の長城のような立派な堤防でも、蟻の小さな穴から崩れることがあるという譬がございます。崩れるとは限っておらないけれども、崩れることがある。私の努力も、無駄でないかも知れない。しかし、これは何もしていないよりは、私は世のため国のためにならんと思っております。私はこの日本の国を愛しております。本当によい国だと思っております。私は外国の生活が長い。フランスには前後五カ年生活しております。フランスの政府から、お金をもらって、それ以外に、諸外国を約六回に亘り旅行しております。そういう経験からみて、私は日本という国はよい国だと思えます。誰も外国の人はこの日本の国を手伝ってくれない。GNP が増大してけしからんとか何とか言っておりますけれども、私はGNPの増大こそ大事なことです。もちろんそれがただ徒にGNP が増大するだけではないので、適当なブレーキを掛けて、全体としてのバランスをとるといふことは大事だと思えますけれども、

それがあればこそ、豊かな社会というものを、多くの欠点はあるけれども、豊かな社会というものを作りあげつつあるわけでありませぬ。そういう点で、私はこの日本の国を愛し、この日本の国をもっとよくしようという気持ちで頑張っております。

この皆さん方を見ますと、私の若い時の頃を思い出しますね。学生時代というものは、非常に情緒的にも不安定でございます。というのは、一体自分は何になろうかとまだ決まっていな。決まっている人もいるかも知れませんが、決まっていない人が多い。またたとえ決めたとしても、本当になれるかどうかということが分らない。ということは、ひっくり返しますと、あなた方には非常に大きな可能性が存在しているということをはつきりいえるわけでありませぬ。非常に大きな可能性と申しますと、例えばたいして大きくはないかも知れませんが、あなた方はやはりちゃんとした大学の先生になり、博士になる人もこの中には沢山居ると思えます。或は実業界に出て立派な会社の社長になる人もきつと居るに相違ない。また誰も卵ですから分かりませんが、私はそう思っております。そういう人がこの中に居ると思えます。そういう人たちに對しましても、私たちが努力をして、この日本という国をその人たちに渡して行かなければならない。私のような保守反動

という人間は評判も悪いし、お前のような奴は早く死ねといわれるかも知れない。早く死んでしまってもよいんですけども、ともかく生きている限りにおいては、私は私なりに努力して行きたい、そう思っております。それがあなた方に対する義務だとこういうふうに思っておりますわけでございます。

こんな新聞の批判をしても、別に何の得にもなりません。空しいですよ。本当に空しい。状況は絶望的でございます、何もこんなことをやって、ぎやあぎやあ騒ぎ立てたって仕様がな。世の中成るようにはか成らないという考え方もございます。しかし、さつきの蟻の譬のように無駄かも知れないけれども、無駄になつてよいじゃないですか。生きている限り私は一生懸命にやっけて行く。それ以外に私の生き方はないんだと思っております。

そういう意味からいって、私らはもう御用の終わった人間ですが、諸君のようにこれからどういう人に成るか分からない可能性を秘めた若い人たちに、こうやってお話できたことを大変嬉しく思っております。反発する人が、この中に居るかも知れない。反発する人が居ても結構でございます。桶谷はあんなことを言っているけれども、あんなことばかり言っても仕様ががないじゃないか、と腹の中で思っている人が居るかも知れない。居てもよい。然しその人が

何時かは、桶谷がああ言っていたけれども、やはり彼奴の言うことは本当であつたじゃないかと、そう思つてくれなくてもよい、思つてくれる人が居れば結構であります。私はそう思います。人生というものは空しいものです、本当に。

どうも「清聴有難う」ございました。

〔文責在記者〕

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。